

WMO だより*

近藤 洋輝**

私は現在、WMOの研究開発計画(RDP)部に勤務しています。WMOは160の加盟国・領域(ホンコンなど)で構成され、事務局はジュネーブに本部およびアジア地区事務所のほかに、アフリカ、南米に各々地区事務所があります。事務局本部の職員は国際色豊かな約300人から成り、うち日本人は4人です。

WMOの設立目的の1つに「気象学及び関連分野についての研究及び研修を奨励し、それらの国際協力を支援する」ことを挙げており、RDP部は特に、短中期予報・長期予報・熱帯気象・環境汚染・雲物理及び天気改変の分野を担当しています。気候の分野は別に(WCRPやIPCCなどで)扱われています。

昨年5月には、次の4年間の財政・活動方針を決める、世界気象会議(第11回、Cg-XIと略称)が開かれました。従来の活動分野を維持しつつも、地球温暖化などの気候変動の問題やオゾンホールなど地球環境の問題に更に積極的に取り組むことになりました。その具体化の1つは、研究開発計画を改称して大気研究環境計画(Atmospheric Research and Environment Programme)としたことです。この中にはオゾン等大気成分の監視(BAPMoN—バックグラウンド汚染監視—を含む)、汚染物質の化学変換・輸送、更には大気成分変動予測も目ざすGAW(Global Atmospheric Watch)が含まれています。

WMOは今後の活動を進める上で、他の機関との協力が増々重要になっています。特に、気候変動や地球環境問題については、1990年の世界気候会議(ジュネーブ)や今年ブラジルで予定されている国連環境開発会議(UNCED)などのように、UNEP(国連環境計画)を始めとする国連の機関(WHO、FAOなど)との協力が必要です。私の担当している熱帯気象の分野を例にとれば、1990年アフリカ・ニジェールで開いた乾ばつに関するシンポジウムでは、上記のUNEP、FAOのほか、

UNDP(国連開発計画)やフランス政府が後援してくれました。又、イタリアにあるICTP(国際理論物理学センター、IAEA国際原子力機関/UNESCOに所属)も最近、環境問題や大気科学に関心を寄せ、1990年初めてWMOと共同で、熱帯域のLAM(狭領域モデリング)に関するワークショップを開きました。国連は、1990年代をIDNDR(国際防災10年)として活動していますが、これに関連してはICSU(国際学術連合)が、WMOに呼びかけ、共同して熱帯低気圧に関するシンポジウムを今年10月北京で開く予定です。ICSUとの協力を促進するものとしては、1993年7月に横浜で予定されているIAMAPの分科会でモンスーンおよび熱帯低気圧のシンポジウムに対し、WMOが後援することが提案されています。

日本は財政的にはWMOの経常予算に対し、現在の8.53%から9.17%(92・93年)更には9.32%(94・95年)の貢献が求められており、いずれも米・ソに次ぐものです。活動面でも、数値予報や気象衛星、その他の観測、通信、データ処理・管理を始め、個々の研究活動でも重要な貢献をしています。しかし、日本の業績が国際的により広く知られ、反映されるには国際的活動において、より多くの人の貢献(会議への参加など)が是非とも必要と感ずります。私自身も、日本での研究活動が紹介される機会が正当に与えられるよう努めています。

さて私はこの間、事務局内での仕事のほかに、色々な会議を組織し、出席する機会を得ました。熱帯地方で開かれる場合が多く、気温43度の砂漠も体験しました。政情の安定していない途上国では際どい経験もあります。89年末、マニラで2週間にわたる熱帯低気圧の国際ワークショップを組織した際には、途中で軍の一部によるクーデターが企てられ、空港は閉鎖され、市の一部は占拠されました。国連の窓口となっているUNDPの安全対策の担当官に連絡をとり、会場兼宿泊所となっているホテルからは外出しない方針とし、週末もエクスカッションを中止し、介入した米軍の戦闘機が反乱軍機を追跡する轟音を交えながらも会議を進めました。その内

* A letter from WMO.

** Hiroki Kondo, WMO事務局(WMO/RDP).

に、UNDP の事務所も、次には担当官の家も反乱軍に占拠され、UNDP は臨時の連絡先から指示してきました。しかし、幸いにも会議最終日の前日に反乱軍が投降して、間一髪で危機をきりぬけました。100人近い参加者の会議だっただけに今思っても冷汗の出る思いです。又、1990年、エチオピアで会議を開いた時は、北部から反政府勢力が迫っており、要所に軍が検閲している物々しい状況で、会議が無事終了するかどうか不安でした。実際、半年後には政権が崩壊しました。

私はこちらに来てから二年近くになりますが、この間に東欧、ソ連の激変ぶりは目をみはるものがあり、WMO

の活動にも直接・間接に影響が生じそうです。東欧では数カ国で数値予報、特にLAMに関心があり、中でもユーゴは、Mesinger の指導のもとにモデル開発が進んでいただけに、現在の混乱した状況が気がかりです。

ジュネーブの夏は、夏時間の採用と北緯46度の位置とで日が長く、人々は陽光を愛でていますが、9月末には平常の時間にもどり、急速に日暮が早くなります。効率性や迅速性よりも、確実性や安定性を重視するスイスの国民性は日本人にはなじみにくいところがありますが、実直な面には親しみを感じています。

地球惑星科学関連学会1992年合同大会および共催シンポジウム 「赤道大気上下結合」のお知らせ

1992年4月7日～10日に、地球惑星科学関連学会合同大会（第3回）が京都大学教養部において開催されます。気象学会は表記の共催シンポジウムを開催する形で参加します。多数の気象学会員の出席を期待します。

日程およびプログラム

日時：1992年4月8日（水） 13：00～18：00

会場：京都大学教養部（合同大会A会場）

共催：日本気象学会、地球電磁気・地球惑星圏学会

世話人：廣田 勇（京大理）・深尾昌一郎（京大超高層）
山中大学（同）

イントロダクション（13：00～13：10）

座長：深尾昌一郎（京大超高層）

趣旨説明：赤道大気への憧憬（10分）

廣田 勇（京大理）

セッション1：海洋↔下層大気（13：10～14：40）

座長：住 明正（東大気候研）

1. 季節風と海洋変動（25分）

山形 俊男（東大理）

2. アジアモンスーンと赤道大気・海洋結合系（25分）

安成 哲三（筑波大地球）

3. 赤道域の積雲対流活動とその変動（25分）

村上 勝人（気象研）

——休憩（14：40～14：50）——

セッション2：下層↔中層大気（14：50～16：20）

座長：山中 大学（京大超高層）

1. 準2年振動の力学（25分）

高橋 正明（東大気候研）

2. 低緯度成層圏・対流圏の光化学（25分）

近藤 豊（名大STE研）

3. 赤道域のオゾン分布に見られる経年変動（25分）

塩谷 雅人（京大理）

——休憩（16：20～16：30）——

セッション3：中層↔超高層大気（16：30～17：30）

座長：福西 浩（東北大理）

1. 大気潮汐波と下部熱圏の力学（25分）

宮原 三郎（九大理工）

2. 低緯度電離圏の力学（25分）

田中 高史（通総研）

総論討論：新しい問題点とその打開策（17：30～18：00）

座長：深尾昌一郎（京大超高層）

なお、コメンテーター数名（各OHP1枚、時間3分以内）を募集致しますので、関心のある方は、世話人（山中大学・電話 0774-32-3111 内線 3353）まで御連絡下さい。